

13

横浜居留地にあった外国系公共病院

山田 裕道, 若尾 みき, 酒井 シヅ

順天堂大学医学部医史学研究室

安政元(1854)年江戸幕府は横浜村において日米和親条約を締結したが開港場は下田と箱館であった。当時横浜村は半農半魚の寒村でしかなかった。安政5(1858)年幕府は日米修好通商条約を締結し、神奈川、長崎、新潟、兵庫の4港を開いた。アメリカに次いでオランダ、ロシア、イギリス、フランスなどとも同様の条約を結んだ。しかし開港場神奈川は東海道の宿場町で細長く狭い町で、外国人が居留し交易を行うに適切な地ではなかった。そこで幕府は突貫工事で横浜村を整備し広い居留地を用意し、横浜も神奈川の内と詭弁を持って開港場の移転を強行した。河川・運河と海で四方を囲まれた横浜は外国人にとっては安全な街であった。文久元(1861)年の横浜絵地図にはすでに出来上がった外国公館、外国商館、教会などが描かれている。海外から多くに外国人がやってきて、横浜居留地は大きな町になっていった。町ができる次に必要となるのが医療施設である。個人が設立した無床医療施設の開業医にはダガン、ベイツ、フィッシャー、ヘボンらがいたが、有床の医療施設すなわち入院ができる病院はなかった。このため居留民団の代表プロイセン領事フォンブラントは病院設立に奔走する。

その結果文久3(1863)年4月横浜で最初の公共病院(ここでは民間団体が運営し民間人を診療するという意味で)、The Yokohama Public Hospitalが誕生した。その場所は居留地88番で本町通りを西進して掘割にあたった右手になる。当時はここには橋がなかったが、現在は前田橋の交差点北側になる。地番は同じく山下町88番である。この病院の建物は元治元(1864)年、イギリス人写真家ベアトがフランス山から撮影した写真の左端に写っている。元イギリス海軍軍医で公使館付医師であるグリフィス・リチャード・ジェンキンスは退任後、後任医師のウィリアム・ウィリスとともにこの病院で診療にあたった。病院は各国居留民からなる委員会が当初2065ドルの寄付をもって管理・運営にあたり、医薬品や医療に必要な物品は政府価格で香港の病院船から供給された。やがて日本人も診察するようになり、ジェンキンスは無報酬で診療に従事したが病院は経営難で慶應2(1866)年閉院となった。各国居留民からなる委員会はさらに規模の大きい病院の設立を望んでいた。

時を同じくして居留地山手82番にオランダ海軍病院があった。オランダは長崎での蘭方医学伝習の成功を踏まえて、江戸への進出を企て江戸幕府に軍医学校と病院の設立を働きかけていた。その準備としてまず先に横浜に海軍病院をつくり、横浜に来ていた元オランダ海軍軍医ド・メイエルとヨングに診療を命じた。しかし幕府は崩壊の危機にあり、軍医学校どころではなく、山手の海軍病院も経営難となり、オランダ領事館はもはや海軍病院を手放すことを考えていた。The Yokohama Public Hospitalを失い、第二の公共病院の設立を考えていた各国居留民委員会はオランダ領事館と交渉し、ほぼ無償でこの病院を譲り受けることに成功した。その直前から病院名称はオランダ海軍病院からThe Yokohama General Hospitalに変更されていたが、ここに名実ともに二代目の公共病院が誕生した。ド・メイエルとヨングが再任されここでの診療を継続して担当した。病院は委員会の支援を受け、居留地の各国の民間人の診療を行い、のちには日本人をも診るようになった。メイエルのあとはダリントン、エルドリッジ、ウィラーなど英米の医師が担当した。横浜にあった、アメリカ、イギリス、ドイツなどの海軍病院は関東大震災で壊滅して撤収したが、The Yokohama General Hospitalだけは代替地(中村町唐沢)で診療を続け、やがて元の地(山手82番)に病院を新築して、ほぼこの形態のまま戦時中まで診療を行った。